

◆八木健 選 ～句集『岬(とき)の跡(あと)』に学んだこと①～

角川文化振興財団の月刊誌『俳句』四月号の「新刊サロン」の欄で、梶原美邦先生の句集『岬の跡』の書評を書かせていただいた。

時とは、特別なトキと日常のトキを合わせた時間のことであり、句集名の「岬の跡」とは、その「時」の痕跡という意味だそうである。句集は「時の音」「時の香」「時の色」「時の跡」の四章からなる。

以下は、句集を拝読して感じたこと、学んだことであり、実際に掲載していただいた内容である。

感じたことをどう表現するかが俳句づくりで最も悩むところである。うまくゆけば自身が納得し読者を驚かせることができる。句集『岬の跡』を拝読して、作者は巧みな表現で読者を唸らせる「何か」をお持ちだと思った。その何かとは何かを分析させていただいた。

その「何か」の一つに、「意外性の新鮮」がある。例えばこの句、

数冊の暑さが重くなる鞆

「重さが暑く」なるのでは当たり前。「あつさ」は「暑さ」であり、数冊の本の「厚さ」でもある。「暑さが重く」の表現によって、一冊ずつの厚みがずしりと伝わってくる仕掛けなのだ。

柱時計のしづかさの鳴る去年今年

「しづかさの鳴る」の表現では、「静か」と「音」の真逆の言葉の組み合わせによって、年が改まる感慨が効果的に表現された。音の静かな重みが、時間の重みに重なってくる。

一枚の秋思たたんである手紙

「一枚」と「たたんである」は「手紙」のことだが、「秋思」にも掛かる構造になっているために、これまでにない全く新しい句になっている。

「何か」の分析の次は、「擬人化」である。その技が巧みに使われている。

赤鉛筆が丸くれたがる休暇明け

一般的に、赤鉛筆というのは訂正か添削に使われる鉛筆である。ところが、この句では肯定的に「褒めてやりたい」気持ちを赤鉛筆に語らせて、実に愉快で優しい句になっている。

留守番の日の風鈴がむきになる

この句は、おそらくは少年の頃の思い出だろう。誰もいない、一人の留守番の心細さ、自分だけが置いていかれた悔しさが、風鈴に重なる。

擬人化して物に語らせると、心情、情景をより深く表現できるということの見本である。

「何か」の三つ目は、「オノマトペ」が効果的に随所にちりばめられていることである。狙い過ぎると浮いて違和感を生じさせるが、この句集では見逃してしまうほど自然体である。

空缶のちやらんぼらんと川四月

囀りをちらちら落としみる大樹

枝豆のつるつと本音出でしまふ

落蟬の死がざわざわと掃かれをり

退屈がごろんと眠る大南瓜

句集を開く時、どんな俳句に出会えるのだろうかといつもワクワクする。そして期待を超える俳句に出会い感動する時、作者の感性に共鳴してオマージュの句が生まれる。今回、三十句以上のオマージュができたが、そのうちの一つを。

自転車の倒れっぷりの春一番 美邦

低姿勢春一番へペダル踏む 健

ここまでが、角川『俳句』四月号の内容だが、面白い句が多く、書評のための句を選定するのにはとても苦勞した。

落ちてなほ時間の鼓動べにつばき
散る紅葉みんな明日になりゆく
遮りし咳反論をしはじむる
福藁を踏んで未来へ入らうか
同じ顔にばつたり逢ひし初鏡
土の香の春意あつめてゐる箒
帰省して昔へ迷ひ込む日暮
すりぬけし蜻蛉の乾き掌にのこる
生牡蠣食ふ嘘なめらかに出てしまふ
過去はみな横顔むめの咲きにけり
とりどりの時間が落ちてゐる椿
おでん屋に酔うて話が焦げはじめ
玉葱ごと悔い真二つにしてしまふ
店出でし西瓜が力抜く重さ
子が夢を画鋏で留むる休暇明け
詰問へおでんの串がまづ答ふ

次号では、作っていたにも関わらず掲載とならなかった三十余りのオマージュの句もご紹介したい。